

2013年度 代表事業③

事業名

11月度国際交流事業

「未来へ繋ぐ～静岡」Cの国際交流」

委員会

国際交流委員会

委員長：山口 貴史

副委員長：増田 康之

副委員長：横山 拓

幹事：浅川 実



事業趣旨要約

今年度静岡JCは、激変する国際社会においてメンバーがアジアの一員としての自覚を持ち、国際感覚を養うことを目指し、青年会議所として成長志向型の相互理解関係を構築すべく、先般韓国仁川青年会議所と姉妹青年会議所を締結した。今年度国際交流元年と定め、メンバーに国際交流の魅力伝えること、また仁川青年会議所との交流を具体化し、今後の静岡JCにおける国際交流の環境を整備していくことは、国際交流事業に与えられた責務である。

今後、仁川JCとの間で交流を深め持続的な関係を構築していくためには、国際交流に対する意識を醸成することはもとより、LOM全体で具体的な交流イメージを共有していく必要がある。本事業では、まず第1部に今年度の国際交流委員会の活動を改めて振り返る。第2部では、実際に国際交流をされている行政・民間団体の代表者をお呼びし、シンポジウム形式にて生の交流談を語っていただくことにより、メンバーに国際交流への理解をさらに深めて貰う。そして第3部では今年度国際交流事業の集大成として、仁川JCとの交流を含めた今後の国際交流に対する具体的な提言を行う。

背景

・今年度静岡JCと韓国仁川JCは姉妹青年会議所を締結したが、今後の具体的な交流方法を検討し、またそれを実現させるための環境を整備する必要がある。
・国際化の必要性、国際交流の魅力を一人でも多くのLOMメンバーに伝える必要がある。

効果

・静岡JCが国際交流を進めるにあたり、その具体案や進め方を示すことにより、今後の活動を円滑に進めることができる。
・国際交流に関わる有識者の方々の体験談を聞くことにより、国際交流に対しての具体的なイメージをLOMメンバーに持たせることができる。

事業内容

【第1部】～静岡JC国際交流の歩み～
◇4月度例会の紹介
・急成長するアジアの中で日本の立ち位置
・国際交流の必要性
・相互理解関係の構築
・仁川JCとの姉妹締結
◇相互理解プログラムの紹介
◇静岡JC国際交流検討会の紹介

【第2部】～国際交流の先駆者に聞く 国際交流の楽しさ・厳しさ～
行政・民間団体の各国際交流担当者の方々より、国際交流の魅力・注意点・影響などを聞き、メンバーに国際交流の魅力を理解して貰い、具体的なイメージを持たせる。
■静岡県地域外交課 石ヶ谷彰英様
■静岡市国際交流協会 石黒幸子様
■国際こども学院外国語専門学校 袴田晴子校長様

【第3部】～これからの国際交流に関する提言書・仁川JCとの姉妹交流ガイドラインの概要発表～
・国際組織であるJC1のネットワークを最大限に生かした国際交流
・国際交流にあたっての心構え
・仁川JCとの活動を円滑に行うためのガイドライン周知徹底

事業の流れ・目的

- 【人的交流事業】
①メンバー同士の交流事業 ・ホームステイ（JCメンバー同士） ・懇親会（メンバー同士が相互理解を図ることができる）
②対外対象者を含めた交流事業 ・ホームステイ（青少年育成事業・企業交流）⇒静岡祭り・清水みなとまつりなどのイベントと共催
③キャビンネットを中心としたメンバーの定期的な交流 ・静岡JC⇒仁川JCの周年事業への参加（毎年10月開催）・仁川JC⇒静岡JCの定期事業への参加（1月の賀詞交歓会、12月のクリスマス家族会）
- 【スポーツ・文化交流事業】
①親善スポーツ大会（野球、サッカー等お互いの国で盛んなスポーツを通じた交流）⇒JCチーム同士、少年チーム同士、Jリーグ対Kリーグ
②お互いの伝統的な遊びを楽しむ⇒羽子板・凧揚げなどの遊びを韓国の子供たちとともに行うなど
③お互いの国の文化についての勉強会⇒食文化や静岡の誇るお茶文化などの紹介、歴史施設の訪問
- 【その他】
①ビジネス交流⇒ビジネス留学の仲介、ビジネスを題材とした会議、職場紹介
②お互いの国、都市についての勉強会⇒仁川・静岡の過去・現在・未来にわたるビジョンを共有する
③相互理解プログラムの実施⇒違いはあって当たり前という前提の下、交流を推進するために必要
- 【既存の静岡JC事業への参加（今年度例）】
①未来学園事業の共同開催 ⇒ キャンプ等、青少年事業を共同開催
②まちづくり事業の共同開催 ⇒ わがまちの国際化のため
③会員研修事業の共同開催

達成検証

事業目的に達した点：
・ASPAC光州大会にて、正式に姉妹青年会議所を締結した。
・新入会員を含め、今年度の国際交流事業の歩みを説明することにより、姉妹締結を含めた国際交流の必要性を改めて理解することができた。
・国際交流を経験されている方々のお話を聞くことにより、国際交流の魅力また厳しさを感じることができた。
・これから始まる静岡JCの国際交流の在り方、また仁川との交流における可能性について講義方式で説明したことによって、より聞きやすい内容となり、理解を深めることができた。

所見

国際交流、国際化という、難題に対し①日本の立ち位置を指し示す多角的な統計資料、②実際に国際交流を図っているLOMメンバーの声、③交流先として提案する方々の生の意見を中心に据えて貰うことによりメンバーの理解を深めた。本例会を通じ、「国際交流の必要性」「成長志向型の相互理解構築の有効性」「仁川広域市の可能性、仁川JCの魅力」に関して、ヒアリング結果からみても一定の理解は得られた。今後は国際交流を継続的に行うことが、大切となる。メンバーがグローバルな人間へと成長できるよう、10月の事業に向け委員会運営を進めていく。

6月に仁川JCと姉妹青年会議所を締結し、今年度の国際交流事業の集大成となる11月度事業において、今後の静岡JCの国際交流の在り方、また仁川JCとの交流の可能性について、メンバーに対し提言した。文章のみの提言書の説明ではなく、講義形式での説明としたことも奏功し、メンバーの理解がより深まった。また、実際に国際交流をされている外部講師の方々に体験談を話していただくことにより、国際交流をより具体的にイメージすることができた。

目的

・国際交流に対する具体的なイメージをLOM全体で共有する。
・LOMメンバーの国際意識醸成をより深める。

事業概要

日時場所：2013年11月19日 19:00～21:00 静岡市民文化会館 大会議室
（6月15日仁川青年会議所との姉妹青年会議所締結事業 場所：2013ASPAC（大韓民国 光州広域市））
参加人数：・静岡県地域外交課海外交流班 石ヶ谷様、静岡市国際交流協会 石黒様、国際こども学院外国語専門学校 袴田校長
静岡JC会員（結果、108名）
事業総額： 29,000円



担当委員長Q&A

01 JICならではの国際交流とはどのようなものとお考えですか。委員長のご意見をお聞かせください。
 JICという同じ志を持ったもの同士、政治や宗教に関係のない民間交流ができます。JICだからこそできる国際交流とは、民族・国家を超えた関係を構築することができるものだと思います。

02 旧清水JICと仁川との交流などが過去にあったとお聞きしましたが、静岡JICと姉妹締結をする候補の都市はたくさんあったと思います。その中で、仁川との交流を決断された大きな理由を教えてください。
 まず、日本はアジアの一員であることを再認識することが国際交流に繋がるのだ、という点にターゲットをおきました。そして、静岡JICとしての過去の国際交流の歴史を紐解きながら、また、過去の交流に配慮してほしいという要望も取り入れながら、いくつかあった交流先から仁川を候補として挙げました。実際仁川JICが我が静岡JICとの交流を一番前向きに検討しておられ、相思相愛のもと姉妹締結することができました。

03 違う国の青年会議所と調整を図る中で、自分自身やLOMとして得たものを教えてください。
 固い友情やおもてなしの心を得ました。
 また、国民性からくる考え方の違い、特に、日本人の遠慮深さに改めて気付きました。

04 多くの団体と調整を図る中で、自分自身やLOMとして得たものを教えてください。
 国際交流を進めている静岡市内の各団体と連携できる体制を静岡LOMに残すことができたことです。

05 違う国の方々のコミュニケーションで気を使った点や工夫した点はございますか。
 仁川(韓国)では儒教の影響で序列を重んじるので、懇親会での座席の順序や配車時の座席などに特に気を使いました。また、国民性が仁川JICの体制が、予定がなかなか決められなかったことや急な変更に対応することもあり、静岡JICとしてはスケジュールリングに気を配り、工夫という点よりもただ我慢しなければならないことも多くありました。直接交流するときも通訳を介してコミュニケーションを図りましたが、通訳時には誤解を生む可能性があるという点を学ぶことができました。

06 提言書として国際交流の在り方をLOMに残した利点や苦労した点などございますか。
 提言書は、静岡JICが今後国際交流を継続・発展させていく上での羅針盤となるものです。そして、それが単年度制の欠点を越えることに期待しています。苦労した点は、提言書として残す「国際交流検討会」を開催した時に、国際交流に参加したものと参加していないものとの意見の違いがあった点です。

取材全体としてのまとめ・感想

まず、静岡JICが国際交流を行う必要性をLOMメンバーに伝え、JICだからこそできる政治や宗教に左右されない異国のJICとの姉妹締結を果たすことができたようです。その活動の中で、たくさんのメンバーに国際交流の機会を与え、参加したメンバー一人ひとりが国際交流の楽しさを知り、次年度以降につなげる伝道者になることが一番の目的であり成果と感じておられました。

07 この事業を行いLOM全体の意識はどのように変わっていききましたか？
 日本の世界でのポジション、すなわち、日本はすでにアジア一位の先進国ではないことを気付いていただきました。そして、国際化の大切さを理解して、国際交流の価値、楽しさを感じていただきました。今回の交流事業に参加したメンバーは、韓国や国際交流に対する先入観を拭き去ることができたと思います。

08 仁川姉妹締結後の活動はどのようななされていますか。
 現在、SNSを通じて交流したメンバー同士個々に連絡を取り合い交流しています。昨年末も仁川JICの記念式典へ参加し、2014年度も仁川JICメンバーが来静し交流を深めています。

09 次年度への引き継ぎの仕方や苦労した点や工夫した点などございますか。
 一人でも多くのメンバーに国際交流を感じる機会を与えることに努めました。そして、その交流に携わったメンバー一人ひとりが静岡JICの国際交流の伝道者になることが次年度への引き継ぎだと思っています。

10 この事業を行って一番達成感を得たものは何ですか。
 「仁川JICとの姉妹締結」を果たしたことが一番の達成感を得たことです。静岡LOMの国際交流を発展させるきっかけを作ることが出来たことも重要だと感じました。



取材前後での特に気付いた点

当初、「姉妹締結」をすることや「提言書」を残し、書面上の国際交流を結果として残すことが重要な事業と思っていたが、実際は違いました。「姉妹締結」はLOMとして国際交流を行うスタート地点に立つ「きっかけ」であり、提言書を残すことは、国際交流の羅針盤となるものであり、実際は、事業を通じ参加してくれたメンバー一人ひとりが、国際交流の魅力を語る伝道師になることが一番の目的でした。